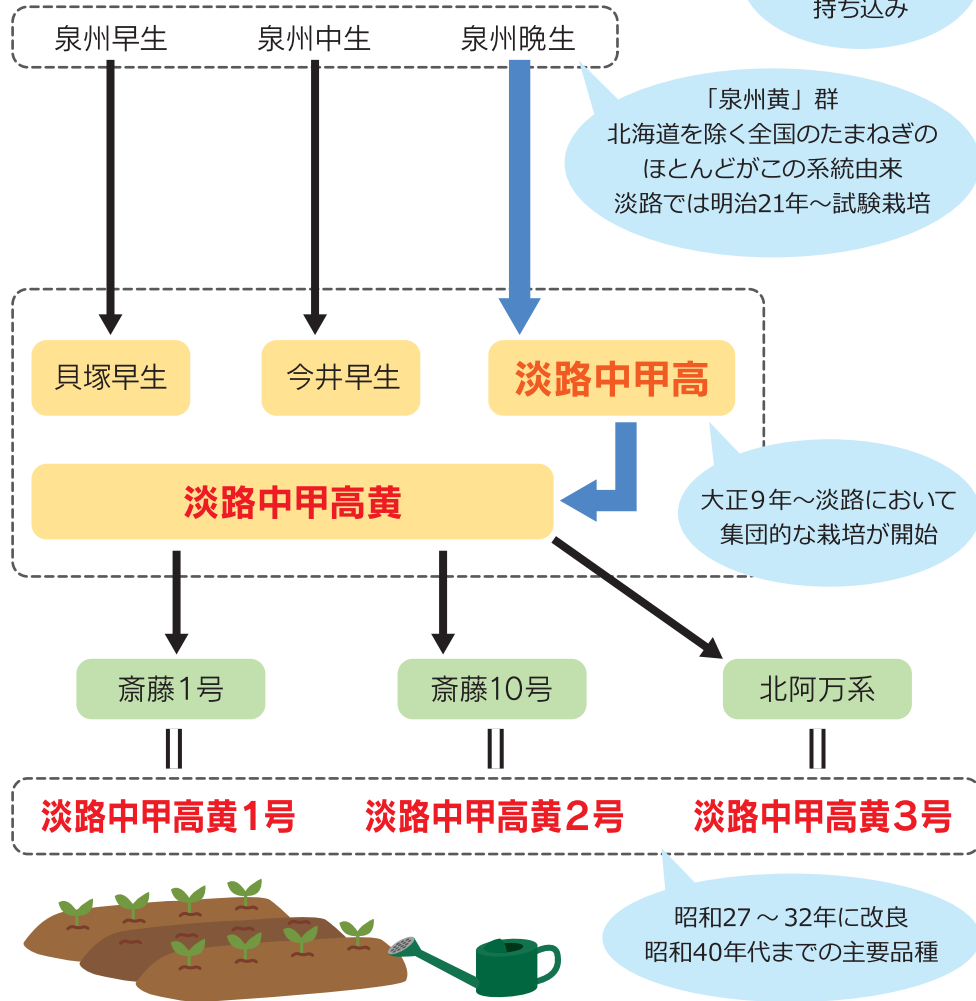


たまねぎ品種 変遷と歴史

イエロー・グローブ・ダンバース → 「札幌黄」
 ブラン・アチーフ・ド・パリ → 「愛知白」
 イエロー・ダンバース

明治15年
アメリカから青果を
持ち込み



「泉州黄」群
北海道を除く全国のたまねぎの
ほとんどがこの系統由来
淡路では明治21年～試験栽培

大正9年～淡路において
集団的な栽培が開始

淡路島で現在栽培される主要品種

「ターザン」 ♀淡路中甲高 × 山口甲高 ♂泉州黄 × 今井早生
 「もみじ3号」 ♀山口甲高 × 泉州中甲高 ♂淡路中甲高

「淡路中甲高黄」系統の発展

淡路中甲高は、F1品種が出てくる、昭和40年代後半（1970年頃）まで、西日本まではたまねぎ生産の約40%がこの系統になったこともあります。

また、この品種は、形も良く柔らかく、甘いことから、F1品種の親となっています。現在栽培されているたまねぎの約50%にこの血が受け継がれています。中晩生品種に限ると、なんと約80%の品種に遺伝資源として生かされています。（北海道を除く）

現在、全国で栽培されている品種の多くは、まず淡路島で何年も試作を繰り返し、品種としての良否が判断され、淡路島に適合する甘くて柔らかい品種として育成されています。

F1品種とは

1世代のみ優良な種子を作るために意図的に親同士を交配させた品種のことで、「雑種第1代」と呼ばれる。
 一方、淡路中甲高黄は自然な栽培の中で優良なもののみ採種して翌年栽培することを代々繰り返していった品種で「固定種」と呼ばれる。



淡路中甲高黄が栽培されていた頃
野水正朔氏撮影・提供



「淡路中甲高黄1号」(左)と
F1品種(ターザン)(右)

「淡路中甲高黄」の特徴

「淡路中甲高黄（1号・2号）」は、現在主流の品種に比べると、やや扁平で果皮はその名の通りやや黄味がかっています。また、淡路島たまねぎの重要な特徴である「甘み」と「柔らかさ」を持っており、早生のようなみずみずしさもあります。2品種ともに従来のものに比べ球揃いが良く、多収性で貯蔵性もよいという特性を持っています。

作型は播種時期はどちらも9月下旬頃ですが、収穫時期は1号が6月20日前後、2号が6月10日前後、3号は1号よりも晩生です。

淡路島の伝統的農法である水稲-たまねぎの二毛作体系に合う、田植え時期までに収穫が可能な1号及び2号が人気を博すようになり、栽培面積も拡大していきました。